



笑註
列子
一

老
子
全
五
冊

^ 13
786
1



へ123
786
7

13
786
1-5



尾字

異國風俗 笑註烈子叙

夫天地空中之一細物。有中之一最巨者也。
故以我天地為天地。則天地亦為一細物。
若以我天地不為天地。則為最巨者。細也。
巨也。難終難窮。此固然矣。由是觀之。於我
大道亦復爾爾。獨以我大道為大道。則大
道亦為一細物。若以我大道不為大道。則為
最巨者。細也。巨也。難測難識。此固然矣。可

烈子叙

甲

手



謂玄玄衆妙之門者乎哉。予閱烈子散人所編之書以我天地不爲天地者乎。故以我天地不爲天地者則能可讀此書焉。若以我天地爲天地者則不可讀此書焉。凡天地六合之間無有有無無是以難終難窮玄玄衆妙之門者也。觀者不可以不察焉矣。

天明改元之秋 武陽夷人原之道識

序

史炎之吟の辛紙嗜し。然ハ乃性好む。法小よりして志のなるなり。予之書の初より。書と學ひハ業ありて入徳の門不道り。十二之書をりりして書籍乃辛と考み。流汲くして。あまがたぬ不寝合はと志す。時々眼乃痛をも肩とせり。あまを味ひあまを味ふと。若よ平あり。一日學友大酒を訪ひ。事りて。予が此物の書籍を好み。寝合はと志す。眼乃了然ともし。感るを呼して。乃夜を不似たりと。あひ笑ひ。き。る厚く物のゆると。懐より身評せり。と。あは乃

烈子散人ガ癖る書一本と出していさふ。幸せ
 冷ふ。癖る。此書と一語の書と書る。乃
 以不。罪そ去り。此。あふまを。持。味。不。合
 料。乃。更。ふ。い。ら。ざ。れ。ど。も。す。物。更。い。な。う。と。移。ん
 して。捨。ふ。も。何。ら。ど。い。も。鷄。肋。う。も。鷄。肋。乃。書。せ
 味。い。な。き。注。と。そ。あ。り。も。お。れ。亦。幸。と。好。む。と
 味。あ。ま。さ。正。又。と。味。不。吾。同。志。乃。若。入。幸。未。と
 乃。た。く。も。や。と。一。二。乃。あ。り。の。意。と。摘。み。そ。り。て。た。り。不
 書。ま。さ。ち。り。一。傳。も。と。乃。形。利。

幸せ改之。初秋。燹都。笑止る。州。

異国 笑註 烈子卷之一

烈子畧傳

朝鮮 幸慶子が陳奪。淳書。小曰。大日本。國東北の。岡。ありて
 報夷と。不。僻。國。の。り。い。し。し。を。ひ。し。此。亦。不。烈。子。散。人。と。す
 家。富。一。貫。人。の。り。其。父。以。風。烈。翁。と。し。母。夫。彼。と。不。其
 先。祖。以。雷。電。王。と。不。此。高。竜。を。い。り。し。虹。娘。と。し。る
 后。と。鶯。鈴。乃。不。此。妻。以。ら。く。初。而。男。女。交。合。の。操。自。論
 の。い。し。延。生。の。り。王子。以。龍。納。を。子。と。し。其。末。無。以。蛇
 行。斬。と。不。風。烈。翁。の。男。を。子。なり。烈。子。と。名。は。し。謂。と
 風。裂。翁。乃。子。り。以。し。風。裂。が。子。と。不。此。畧。と。し。音。介
 烈。子。と。称。る。と。わ。ん。紫。乃。不。北。條。甲。冨。時。政。が。子。の。改。子。非。

六、主以子...

子ハ何方万平鹿の子の袴のとり十四月狐の日小延生
つり梨子生れ一対紫のまもたれどさうて奇場もあう
一やくもやせれあうして聰の睿智あうずさだをい
白痴ともん一む十之經十之家二十一史りらの書月生え
小も渾一筆の筆の道も一ハハは場り一戲龍云乃延
一もあうて三河文章又ハ京の古條珠教や町えんがと
一ロや二口ぐらひハ吟られが此外劍術書例ヲ洗炮
水馬兵法道の事ハおもろ下衆人の存ハ流大酒飲
ぬみ飲とともも鯨の百川飲ふがとく。松前など一
渡り藍里の海軍ハ一松前浦小妻く新書
あうとねん。又ハ風梨海ハ交易の道不急らずお宝

創設と多く幕の渡世が大雨の浮川ばうる運舎後
のさくがりと。生きた人の下度ハ流る縁がねと何玉乃
浦でもお宝りのさうて。風梨海ハ一ハ風のつと小島
りか散く華りて今ハや岐伯船替も寸匙は青囊え
守我周公旦が命請ひの初清の針責もさうとハ
やく。元ハ大師の御家ととれハサハ百番ハて大凶なり
巫女乃詔宣ハハ此病正しく之祖が鳥猫本物の交接
とん後のハも平とあてられと打働一怒念も保く。今
一宗ありてかく一ハあうるあんど。晴ねハ形跡を授
ふまのりどもとつらり。出入りハ一思ハハ後米御儀
朱或ハ守守ねと持来り又ハ番頭なるあふハハを横依

ぐべり時以得たりと心の疾ひ書平々愁歎何るを
 とりり主人の病まき平愈祈りのな其の神其の傳
 へ百皮糸り以執りひりとは難の難まし合能討室
 とは攘めぬくこの業唯業を母不都あまを徒しり
 業多かり限難の付和持あ内い御不乃富以りり。又量
 ともかく移るりりつけくあ内い御不乃富以りり。又量
 賢不かりー歳法さうぶがーはるるーとく下をと圖礼
 漂ぎい程公操の序切りふむりー。あまども死を命有
 り御不風烈公存許年百五早いしと流るる言乃下し
 とみすがりづる。百甫の天助小一年おとりーを毎為除
 根不疫神ひのしよふふりりりあもーおーじゆき小
 於作りり業多かり二甫の天助義明の行年七十九歳かしのたれ知を今
 百六つとふハサさーいー疫神ひの説ふふりりりー

明孝志慕いの程甫の世飛が又以慕ひ石を移りたどと
 く腫腫皺腫乃病をそ并新盤石の移ふさくさうそ
 夢氏堂年七月十日之間魔大王乃其小料葉の所
 とひかりを五治せんお徳ふとしあふひ梨子年三
 七八の二親不別きたのふふを厚き親友とてしき
 御不空く寂くうりて後ふ年月以まうりる世話事
 の或夫本小りるをり四年夢以夢りー支配人たを敬
 りん起り全症破貨はが蟻乃亦以むくぶらう世話事
 とさあや乃程公は地以心く玉腹ー世を折ゆ折
 お不勝乃乃什物於以拍牛ー僮兒小婢は佛前



笑言集卷二

烈子が依不破家あり又か人け欺さるものあり大びり一蝦夷小を
 けりしものりつるやそかく思ふあどふて家家の物たりお歌小別れ
 て人のふありふ金銀はさふとさうくのけりきふら瓜がれ
 我もくとむやい 忽不幾子仕立小やうそのくをうれは式お種のお
 公のいさしとさうくくさふやい 又評者のいしく烈子もけりとの白痴
 してはけりさうとれどおくくれ一ハ前車のうらびささく後車の戒め
 とさうらんつるてもいさの烈子ッ人となりはたがめふふ来
 一人あふて父母の寵愛は外御く樹びたきさういけりも
 不すふ生音一半あれハ白夢世の事ふさく今後の
 教とばあふ思存のりゆふ人のふありふ金銀を奪ひ
 さらまじ僮僕のためふ家破成攘めさうさういじゆあり
 海ふけあ徳烈子一人を大勢あり集りて欺きしる神
 谷のりふふふり落たり不免と小者のあがふふとけふ必
 ともえの不徳といわづらつるれかりるは實之故大さふ

美令の地帯と改つるやとと思ふあ徳歌の事云々又枝
 下さふ一ものたも思ふふ川邊さ今徳とや坊ふ人
 もさういふれさうさうかのは寛治都が鬼界さあふさ
 のこされ一さうさうのふとれさうさうさうさうの風烈
 う二一抄作より濃り復せ 金刺ハ腹以下一衣服
 ちるは質を古衣を(糸紙と一あぬおハ蜘蛛の煙名と
 あり米倉ハ流う之雷又と端みお糸の天井ハ
 雨ハ流を流一その破れ目ハハ月や星ハ歌と上
 穂子ハ列装る侍子の紙ハはれと密虫が臭歌ハ
 うれハ麻の掛ゆゆ糊うさあれさあ糸のさ無親
 水ハ漏る膝ハ足がささる腕ハ缺けら腹ハ空るぬ衣と

まゝとまゝいけ蟻蝶天より何れなる物ふゆふせ自業自滅
此を様と申す出虫より摺扇と申すはと打つ業は
いと打つみじしとありし時刻に又と男あふ凝りて死こに
俗人の病不可憐ふは旅はせよとの言はるゝ今より
我乃ちと云りて日六十六、六十八、及ぶと清天
空より月も星も及ぶ魚の形も乃て月を磨りし
玉より風俗又の教訓ともやうしよ一見して夏なつの故
郷へ取りの海を泳ぐ人ふいかく名をたふしうう雁
さんをさうしゆと云ふとあり客易のゆゑに
評者のいふ。さういふ評の儀審はさういふふゆゑにさういふふや
山を四つ海よりいふとぬん又日六十八、六十九、及ぶと月を磨りし
玉より月も星も及ぶ魚の形も乃て月を磨りし玉より月も星も及ぶ
魚の形も乃て月を磨りし玉より月も星も及ぶ魚の形も乃て月を磨りしと云ふは天の
外にありしと云ふは天の外にありしと云ふは天の外にありしと云ふは

骨小て山川万里雲舟の磁路ありはゆきとと思はれど
あつしあれどむかりを透すと云ふ深乃孝康が石をえ
伏し虎と魚の捕はれを射るふ矢乃羽ぶつと飲心
とこれと我病庵がむくは田舎谷二人乃之弟が健は
と清くして赤い花はあふもあふも力業もまをいとくわ
虎の子のつとて千軍も一隊ふもらんとあひひれ
どもいふしそゆのゆゑ旅あれはあはれ神佛の力を
あふんばはれ年就とあふんとあひひれ一七がうら精ん
繁茂は休宿と我の天神地蔵と祈るとそいとそくと
南無と天地ふゆ中神佛我が母のちりてあひひれ
石より八法をさふ日較うら花飾り疲瘦きり糸介

少くも爪倍とせり一の短くきりきりしと西と
 洋々東と洋々一く不祈如云一乃多ん此を不七也
 備まきども神代さふふんえされ然子今にれも力し
 ねくいにく倦怠なきも糸ぶららくせよと傍ひ倦怠ふ
 かつて痛くうら海と病せんせし一不淋不思云云 摩
 ぢら高電一きりふ吹動一乃時一も金庫を織く髪
 もと出ー然子と抱撲で何ともかくはまのきりーと
 むんまー一ぶらり一ほどそ吹くたる蒼天不牛か
 一織くたるら山乃絶頂不妄とて一獨坐せり
 然子の愛のくこと一して四方の景色と一中まはるり
 何ばいなるふとふりせとふぞい、糸もも磁石富士

山々天竺と中んふりうとき須弥山の他一人境不
 乃芳華山るん或は乃代傳乃おひせ名一と
 仲佛のはくふりりて地獄の死天の山光らうりしと
 今文か一海梅一乃不又く大風吹まるとめんえ
 一いごつこ乃岩石乃と本一の所た在の柔弱と
 せー美を本一忽とて一顯を坐ての尻すくく葉
 くれぬん天地乃阿不彷徨ら風事神と、殺しあり
 或人のしう海初字は常葉さお膝を被と 汝一も天地の神は
 新と云せ一奇特ふり法神人の度とて某おひひ
 汝が歌小伝也今い山とふは色を弄れり之の代携一采
 リー一けを眼鏡とて日本支那天竺と一不あせく



やとよるう倫道おハ丸烈為父子の以澤しそ
 何由称くも致不也せし以と之存のらく丸烈為
 其誠以て一ても烈子一而父命不其れるの自癖
 其の形ふはけときこそ天命ことも固執ことも必ひ覺
 悟せ定先て後覺といふりも何れバ伊尹傳説がふ
 とき良法以て烈子不傳並に其の如き後不
 ひびく今流城室を奪れ之程の墓不祭祀以も忽
 小竈以破厥其の程の墓不祭祀以も忽
 じく良法を傳せても其の未見そけきりこ之覺
 形を其の程の文傳え一祭不其れざるこ之覺
 愛子たりとも其れと追退け親族仲之と他族の

一た良才何りてあてを其の程の祭祀と廢ざる
 ほどの人其を以て我の皇子とさ入り聖賢乃親
 短もつけし覺きこ之程の祭祀といえバ如きふ其
 れど其れをさひめてた聖人もその以て其を世法
 やり其れを程の祭祀以廢して其誠以て不其れん
 今以て其の例といふん其の帝舜の帝舜も
 傳不七聖人のこち乃巨礫もて海に投し其れ不
 其れ太子たるが其れも其れを其れを其れを其れ
 らを其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ
 の帝ハ他人の舜小夫下以禮り又舜の帝ハ他人の

禹王小天下と譲り二人乃太子へお怒り申せり
流侯とわすれんぬれ二太子たふ天下譲り
万民とせしむる君量海一雨さるとんれ地人
譲りて親子の情以りき給ふんや二太子
小不肯やんぬれハもさる天子の徳以り
万機の及と知し給ふんの方氏の憂い
あふるは給ふぬひのくえんぬの
これ愛と飽きし所子以退す万民のたふ他人
評は譲り給ふ聖人の所心の厚く徳に徳の
評は感とふ給ふぬひのくえんぬの
評は竟舞の帝と以りハ多流とふさるる

修身先人何れんぬれどやが評ハ廣く
田夫野郎ふ給ふぬの又中は徳以り
古今の書籍小譲りいふも徳の君子といふ
ふ給ふぬぬ井中の蛙と燕雀の徳も
の君子と笑ふて恥るぬ又井中の蛙と
花の徳の譲りはけぬハ蚊とふ小虫と
祭して唱ふぬぬんぬと徳以り
いへりハ今の人の子と徳をさるる
徳とせ給ふぬぬぬ徳と徳と
我子とせ給ふぬぬ徳と徳と

